

十七

レブンアツモリソウの受粉を  
邪魔する迷惑な生き物たち

#### ●コマチグモの仲間

唇弁の袋の中は温かいのか、ハチが入ってくるはずの天井の穴を糸でふさいで、袋の中をすみかとしてぬくぬくと暮らしています。

## ● ガの仲間

白い花は夜目立つので、花を訪れたガが穴に詰まってしまうこともあります。ガは脚力が弱いので、花粉の粘液を背中に付けても脱出できず、結局、出口をふさいでしまいます。

### ●カタツムリとミノムシ

花粉入りの粘液や唇弁をかじって食べてしまします。

## ●カラス

頭のいいカラスは「遊び」の概念も発達していて、遊びで花を食いちぎってしまいます(チューリップなども食いちぎります)。

杉浦准教授は、益虫も害虫もひっくるめて、レブンアツモリソウをめぐる生態系のネットワークの研究もしています。

壁を登るよう花はうつむき加減に咲いています。壁を登つていくと光の差し込む出口がハチを誘います。ハチの光に向かう性質を利用した仕掛けです。レブンアンモリソウはこのようないい巧みな仕掛けをさまざまに施して、ハチが必ず雌しべ(柱頭)と花粉のあるところを通り抜けて行くように工夫しているのです。

虫をだます花を観察している  
と、次第に昆虫は学習し訪れる  
頻度が下がるので、何日間にも  
わたつて忍耐強く待つ覚悟が必要  
です。杉浦准教授は毎年数回  
初夏から秋にかけて礼文島を訪  
ねていますが、北海道最北端の  
稚内内の沖合にあるため、野外観

## Point 4



### Point 3

レブン  
アツモリソウの  
だましの手口

ランの受粉戦略を中心とした研究が、杉浦准教授の専門領域です。ランの花は花弁3枚、萼片3枚から成っています。部品は同じはずなのに、種類によつて花の大きさや色、形配置などがまったく違います。それを見るに、ランが受粉をするために、いかに策略をめぐらしてきたかがうかがえます。

ランの一部が、なぜ蜜を出さずに媒介昆虫をだますように

なつたのかについては「子孫を殖やすために、蜜を作るエネルギーを節約して種を作る方に回している」など諸説あるようです。現在一番有力だと言われているのは蜜があると、昆虫がいつまでも同じ花茎に留まつて立ち去らないので、隣り合う花の間での自家受粉が増えてしまう。そこで他家受粉を少しでも増やすために、あえて蜜を出さない」という説です。

## 阿蘇の珍しい花②

## カキランのアリ受粉

柿色の花弁をもつことから、「カキラン」と名付けられたランの一種も阿蘇には自生しています。普通は湿地に咲き、足湯の唇弁にハナアブが乗ると、唇弁がシーソーのように上がりつて背中に花粉を背負わせるように進化しています。

ところが、阿蘇の草原に咲くカキランの場合、ハナアブ以外にクロオオアリも花粉を運びます。アリは体の表面に抗菌物質を塗っているため花粉が殺されてしまうことが多く、アリ受粉は非常にまれだといいます。生物学界でも注目されている阿蘇のカキランの受粉、「ランの花粉は塊で付くので、表面の花粉は死んでも中の花粉が生きているから可能なのではないか」と、杉浦准教授は推理

しています。さらに、梅雨の季節に咲くカキランにとって、雨でも来てくれるアリはありがたい存在なのです。

他にも、阿蘇のツルニンジン(キキョウ科)には、普通は花には来ない肉食のスズメバチが、地味な目立たない花が咲くと、取りつかれたように集まつくるそうです。よほど彼らを引きつける匂い物質を出していると考えられ、「スズメバチ捕獲の薬品開発につながるのです」と、杉浦准教授はツルニンジンの化学分析をしてくれる人材を探しているところです。

察は寒空の下でハチを待つ毎口  
研究者も数少ないといいます。

なるほど！

美意識とは心の有り様だと思います。枯れた花にも美を感じる杉浦准教授からは、花への愛おしさが痛いほどに伝わってきました。欠けた器に料理を盛る、千利休の美意識にも通じるような…

